庄垣内さんの思い出

長田 俊樹

庄垣内さんが亡くなって、早一年以上の月日がたってしまった。言語記述論集に執筆しておられる若い大学院生の中には、直接、庄垣内さんに教わっていない方もだんだん多くなってきた。個人的に言えば、残念なことに、学問的な影響はあまり受けたとは思えない。ただ、人間のつきあいとしては、庄垣内さんから学ぶことが多々あった。そこで、この論集に一筆、書かせていただくことにした。

１.

庄垣内さんに初めてお会いしたのは、大学の教室でも、研究室でもない。私が生まれ育った家だった。というのも、庄垣内さんは父・長田夏樹の勤務先であった神戸市外大に赴任し、父の同僚となり、赴任の挨拶をかねて、長田家にやってきたのだ。庄垣内さんの年譜をみると、1980 年 1 月に神戸市外大に赴任しているので、その正月に初めてお会いしたのだと思う。そのとき、わたしは北大文学部で言語学を専攻していた。最初、北大に入ったときは理系にいた。しかし、理学部地質鉱物学科に進学したわたしは、鉱物に全く興味がわかず、転部して、1979 年 4 月から言語学を学びはじめたばかりだった。

父は庄垣内さんが大のお気に入りだった。家では、庄垣内くん、庄垣内くんといって、何かにつけて、庄垣内さんが引き起こす珍事を、脚色を加えて、母や姉に紹介していたらしい。しかし、すでに神戸を離れ札幌にすんでいたわたしは、庄垣内さんについて、全く何も知らなかった。

庄垣内さんが赴任の挨拶で長田家にやってきたとき、ちょうど正月で帰省していたわたしに、父は喜び勇んでこういった。

「俊樹、こっちに来なさい。おまえも言語学を学ぶようになったのだから、庄垣内くんに挨拶をしなさい」

そう応接間から声がかかった。そして、庄垣内さんに初めてお会いしたのだ。しかし、父の期待とは裏腹に、庄垣内さんには反発しか覚えなかった。それはなぜか。庄垣内さんが着ていた三つ揃いが気にくわなかったのだ。公式的な儀式以外で、三つ揃いを着ているのはヤクザぐらいしかいない。そんな短絡した思考しかもちあわせてなかったのだ。三つ

揃いだけはない。あの独特な関西弁にも気にくわなかった。具体的にどんな発言をしたのかは覚えてはいない。しかし、かなり罵詈雑言を浴びせかけたことだけは覚えている。また、父がずいぶんと焦って、ハラハラした様子だったことも覚えている。ただ、「庄垣内くんに何を言うんだ。謝りなさい」と怒られることはなかった。父はハラハラドキドキしながらも、内心どこかで面白がっていたに違いない。父と庄垣内さんの関係はそういうものだった。

このときのことは庄垣内さんもよく覚えておられた。亡くなる前、北野病院にお見舞いに行ったときにも、懐かしそうにこうおっしゃっていた。

「あのころの俊樹は壁に向かって吠える犬のようやったな」

わたしはどうも自分の意にかなわない状況になると、やたら人にかみつく癖がある。人はそれをよく狂犬病にたとえたものだった。とくに、お酒が入るとその傾向がひどくなる。１９７８年の正月明けに、民博に行ったときもすごく荒れた。わたしたちは探検部の一員として、１月末からインドに行くことになっていたのが、そのとき探検部の顧問をやっておられた佐々先生に紹介されて、館長だった梅棹忠夫に、挨拶に行ったのだ。たぶん、梅棹さんの態度が気にくわなかったのだろう。ひどく酔って、梅棹の馬鹿野郎とか叫んで、ドア蹴りまくったという。そのとき一緒だった探検部の友人は大変困ったそうだ。ただ後日、ことの顛末を話す友人はどこかうれしそうでもあった。

梅棹さんのどこが気にくわなかったのか。今となっては全く思い出せない。しかし、庄垣内さんと出会ったとき、なぜ気にくわなかったのか、今でもはっきりと覚えている。庄垣内さんの服装が、いや何となく庄垣内さんの存在が気に入らなかったのだ。今から振り返ると、この愛憎なかばのアンビバレンツな関係はずっと続いていたように思う。どこかで、庄垣内さんを怒らせることをねらって、いやがるようなことばかりを言ってきた。一方で、庄垣内さんから本当に怒られることもあったし、親身に世話をしてくれたこともあった。

なお、この思い出の記では庄垣内さんと呼んでおく。実のところ、わたしは皮肉や嫌みでない限り、庄垣内先生と呼んだこともないし、庄垣内さんから直接、言語学を習ったこともない。庄垣内さんの授業を受けたのは定年の時の最終講義だけである。追悼文だからといって、先生と持ち上げてみたところで、後で落とすための言いぐさだろうと警戒されるだけなので、庄垣内さんで通させてもらう。

２.

庄垣内さんとの出会いは最悪だった。それにもかかわらず、ずいぶんと可愛がってもらった。いつしか、休みで神戸に帰ると、一度ならず、二度三度、庄垣内家を訪問するようになる。北大の友人を連れて、家を訪れたこともあった。それでも、庄垣内さんに会うと、何かを言い出さないと気がすまない。

ある日の庄垣内家で、こんなことがあった。そのころ、インコを飼っておられたのだが、そのインコがなんと「庄垣内くん、がんばって」と叫ぶのだ。それはそれで微笑ましくていい。がんばることに口挟みたくなったわけではない。その後で「インディアン、嘘つかない」と続く。それが問題で、どうしても噛みつきたくなってくる。

「インディアン、嘘つかないはおかしい」

「なんでやねん。インディアンが嘘をゆえへんのはええことやろ」

「インディアンは真っ当な英語がでけへんことを前提にして、変な日本語訳をつけていることに憤りを感じないのか」

さすがの庄垣内さんも、これには黙ってしまった。もちろん、その姿を見て、勝ったと喜んでいる自分がそこにいた。何ともたわいもない。小さな男だ。

ついでにもう一つ。１９８４年７月からインドのラーンチー大学に留学することになり、留学前に、神戸市外大まで庄垣内さんに会いにいった。留学するわたしを前に、庄垣内さんは非常に上機嫌だった。

「俊樹も、いよいよ昼食大学に留学するので、昼食ぐらいおごらんとな」

「ラーンチー大学はＲから始まるので、昼食とは違うんですけど」

これもパンチを繰り出せたと満足したことを覚えている。もっとも、正直言って、こんなことしか、思い出さない自分が恥ずかしい。

一方で、いたずら好きの庄垣内さんが顔を出すこともよくあった。

天理図書館は貴重書を持っていることで知られる。北大の後輩に天理大学の関係者がおられ、その伝で天理図書館の収蔵図書を見せてもらうことになった。そこで天理までご一緒したことがある。大阪駅で乗り換えて、地下鉄に乗るため、地下鉄のホームに降り立っ

たときのことだった。プラットフォームにパンが落ちていたのだ。まだパンの形をとどめていたし、見た目はきれいそうだった。

「俊樹、あの落ちたパンを食べたら、１０００円やるで。」

「なんでやねん。あんなパン食えるか」

「５０００円やったらどうや。いくら何でも１００００円やったら、食べるやろ」

「ワシの後輩Ｔやったら、食べよるで。何せプラスチック製のパンにかじりついたくらいですから」

じじつ、我々の間では、Ｔはプラスチックのパンをかじったことから、パンちゃんと呼ばれていた。庄垣内さんのこうしたいたずらはよくあったが、天理図書館に行くときの出来事はこのエピソードとともによく覚えている。

３.

庄垣内さんから一方的にこっぴどく怒られたこともある。

1990 年 10 月に、妻と娘を連れてインド留学から帰国した。ムンダ人との結婚に反対していた母から勘当されていたため、実家には帰れなかった。さいわい、AA 研の峰岸さん一家のご厚意で、埼玉県与野市（現在はさいたま市）に家を借り、これまた峰岸さんのご紹介で高校の非常勤講師の職を得て、なんとか生活をしていた。

1991 年、処女英語論文がデリーから出版された本に掲載された。また、博士論文の審査にもようやく通過したころだった。何のためだったか、すっかり忘れてしまったが、日帰りで神戸に行くことがあった。そのときに、神戸市外大の庄垣内研究室を訪ねた。吉田豊さんも同席していた。英語論文の話に及ぶと、突然、声を荒げて、怒り出したのだ。

「俊樹、英語論文を書いたから、それでええ思ってるんちゃうか。おまえはもう３０半ばなのに、論文一つ書いただけや。それで、すぐ満足してるんはおかしいんちゃうか」

こうして延々と叱責されたのだ。なんでもすぐ有頂天になってしまう自分の性格をよく見抜いた庄垣内さんの攻撃になんの反論もできなかった。同席していた吉田豊さんが「庄垣内さんは期待している人にしかおこらないのだから」と慰めとも取れなくはないが、どこか腑に落ちない言葉をかけられたこともよく覚えている。

この話には裏がある。じつは、この英語論文を草稿の段階で父に送ったところ、庄垣内さんから、英語ではなく、日本語にしたらどこかに掲載してあげるというお誘いを父を通じて受けた。そこで日本語にして庄垣内さんに送った。ところが、これがなかなか掲載してくれるところがなかったのだ。留学当時は知るすべもなかったが、だいぶ経ってから聞かされた。とくに、さる方から日本の大学に所属がない人の論文を掲載するのは難しいといわれたことには、ずいぶんとお怒りだったそうだ。それならば、ということで、当時庄垣内さんたちが出していた『内陸アジア言語の研究』に掲載してくださることになったのだ。曰く、「ムンダ語は内陸アジアで話されているようなもんや」。

庄垣内さんが亡くなってから、姉に聞かされたのだが、父には「俊樹は言語学の才能がある。だからそれを伸ばしてやらんとアカン」とつねづね言っていたのだそうだ。そんなわけで、京大言語に非常勤で教える機会を与えてくださったし、『言語研究』に掲載するような論文を書くようにも勧めてくださった。ムンダ語の論文など、ほとんどの人が読んではいないにもかかわらず、庄垣内さんはしっかりと読んでいた。ありがたいことである。

いろいろとご恩を受けたことも決して忘れたわけではない。しかし、それでもなお、なぜか、庄垣内さんにはどこかで一言返さないといられない。そんな関係が最後まで続いた。この追悼文もその延長にある。

４.

庄垣内さんの学問的な側面にも言及すべきだろう。しかし、わたしにはその資格がない。モンゴル語も、トルコ語も、ウイグル語もまったく知識がない。そこで、父と庄垣内さんとの奇妙な関係にふれながら、父がよく口にしていたことを書いておこう。

「庄垣内君は職人だ」。それが父の口癖だった。その根拠はというと、「あんだけ穴だらけのウイグル文を読んでみせるのだから」というものだった。父は職人だと言うことを庄垣内さんにも直接言っていたに違いない。じじつ、この職人説には、庄垣内さんが「古文献言語の研究と職人」というエッセイのなかで、こんなことを述べている。

「文献言語の研究には職人の仕事に似たところがあって、そこを言語研究者がしばしば指摘する。その指摘は嫌いである。実際そのような性質があるのだから、いやがる必要はないのに、何年やっていても気に障る」

父が庄垣内さんの気に障るように、君は職人なんだからと言い続けた結果、こんな発言をしているのではないか。この文章を読んだときにまっさきに思ったが、それは考えすぎだろうか。

ところで、この職人という言葉は父が編み出したものではない。大学闘争が華やかだったころ、父は造反教官として、ハンストをやったことがあった。そのときに、岡山大学にいた江実さんが大阪まで来て、父に造反教官など止めるように説得しに来たときに、「長田君、君は職人に徹しなさい」と言われたのだ。それ以来、何かがあると職人という言葉を使うようになったのだ。なお、江さんは戦争中、張河口にあった蒙古文化研究所の副所長（所長はモンゴル人）で、父はそこの所員という関係だった。父が乞食をしていたときに、江さんと偶然出会って、研究所に誘われたという。当人たちはじめ、そのころを知る人々はほとんど亡くなってしまった今、どこまでが事実なのかはわからない。

話がずれた。庄垣内さんにもどろう。父がよく言っていたことがもう一つある。ウイグル人の漢字の読みについて、ウイグル独自の訓読みがあるとの説は「オレの説を継承したのだ」と。その真偽のほどはまったくわからない。

一方、庄垣内さんは父をどうみていたのだろうか。一度だけ、父の学問的評価を聞いたことがある。最晩年、父が朝鮮学報に掲載した論文を京都産業大学に持ってあがったところ、「俊樹、おまえには文献のことがわからんと思うけど、長田先生の論文、まだまだ衰えてへんで」とおっしゃっていた。

ただ、父が勲三等の勲章をもらってから、庄垣内さんは「あんだけ勲章なんかもらえへんと言うておきながら、もらいよった」といって、父の元を訪問することはなかった。なんでも、昔、「長田先生も結局は勲章もらうんでしょう」とからかったときに、父から殴られたのだそうだ。両者を知るわたしには、これは事実だったと容易に想像できる。

「長田先生はなんやかんやいうても、海軍主計少将の息子や。それに比べると、庄垣内家は国家権力に睨まれているから、勲章をもらうはずもない」と豪語していた。

ところが、学士院賞をもらい、天皇を前にご進講をすることになったことは皆さんもご存じだろう。父の叙勲に怒った人がご進講をしたのだから、今度あったときにはさんざんからかってやろうと手ぐすねを引いていた。その矢先、体調を悪くされ、結局、その機会を逸したまま、庄垣内さんは亡くなってしまった。

なお、江実さんについては、『月刊言語』に掲載された、庄垣内さんの言語学界怪人伝に「ステッキ紛失症」として登場する。その次に、言語学界怪人伝として、長田夏樹を登場させるつもりだったそうだが、月刊言語が廃刊となったため実現しなかった。亡くなる前、北野病院でお目にかかったときに、そうおっしゃっていた。

５．

庄垣内さんが京都産業大学に赴任してから、地球研に近いこともあって、２，３ヶ月に一度は昼食をともにすることがあった。吉本新喜劇など、笑いに造詣が深かったし、いつも楽しい会話が多かったが、ときには怒らせることもあった。メルカトル教授としてドイツに行かれたときは、メルカトル教授に選ばれるのを誇りに思うのも、天皇家から勲章を受けるのを誇りに思うのも、同じやといって、怒らせた。このときは同席していた、庄垣内さんの教え子が取りなしたので、大げんかに至らなかった。

いつものように、昼食をともにするため京産大にうかがおうとしたとき、体調がもう一つなので、また今度にしてくれと言われたのが 2011 年の秋だった。その年 12 月、恩師池上二良先生の追悼会が北大であった。池上先生とご一緒に、学会に参加されるなど、懇意にしておられた庄垣内さんも参加されていた。そこで、体調のことをうかがうと、「あれは何ともなかった」といって、お酒を飲んでおられたが、年が明けてから、ガンがわかり、ついには帰らぬ人となった。

北野病院に入院されているときに、お見舞いにいこうかどうか、ずいぶんと悩んだ。考えてみると、庄垣内さんをからかうことはしてきたが、死を覚悟した庄垣内さんをからかうなんて、さすがにできない。さりとて、亡くなる前にもう一度会っておきたい。結局、いろいろと考えあぐねた末、北大時代に庄垣内さんのところに一緒に行くことが多かった姉とお見舞いに行った。いろいろな思いが交錯するなか、ドアを開けて、病室に入ったのだが、「よう来てくれたな」の一言で、それまでのモヤモヤは一遍に吹っ飛んだ。

病院にお見舞いに行ったとき、庄垣内さんの大きさを改めて知らされた。ガンで死に逝く人がここまで冷静にいられるのか。わたしならばとても人に会えるような状態ではない。「おまえ新聞に出てたな」からはじまって、「壁に向かって吠える犬だった」、そして言語学界怪人伝に長田先生を書こうと思っていた話まで、そのいつもと変わらぬ口調に、圧倒された。庄垣内さん、俊樹は本当に弱い犬ほどよく吠えるの典型です。

愛すべき庄垣内さんへ、心よりの哀悼の意を表します。向こうの世界で、また父と心おきなく飲み交わしてください。